

『パルジエヌのラサ旅行』 上下 Alexandra David-Neel

中谷 真理 訳 平凡社 東洋文庫 1999 年刊



■アレクサンドラ・ダヴィッド・ネール (1868 年 -1969 年) の生涯

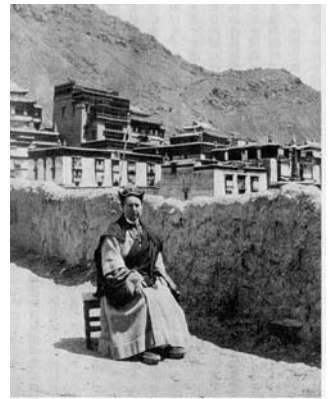
【年譜】

- 1851 父 ルイ・ダヴィッドはルイ・ナポレオンのクーデター (第二帝政) でベルギーに亡命、母アレクサンドリンヌ・ボルクマンとブリュッセルで出会い、結婚
- 1858 フランス政府の恩赦によってパリに帰国
- 1868 アレクサンドラ、パリ郊外サン・マンデで生まれる
- 1871 パリ・コミューン 軍隊とパリ市民の市街戦を目撃
- 1874 6 歳。ブリュッセルに転居。カルヴィン派などの寄宿舎に入る。読書好き。特にジュール・ヴェルヌ
- 1883 15 歳。無断の一人旅。徒歩でベルギーからオランダを通り、英国に上陸。所持金がなくなるまで帰らなかった。
2 年後スイスから徒歩で峠を越えてイタリアへ行く。
「私は生まれながらの探検家であった。幼いころから、庭の扉、道の曲がり角、地平線の壁の向こうにあるものをもとめて逃亡した」
- 1886 18 歳でオペラ歌手をめざし、ブリュッセルの音楽学校へ入学、フランス歌劇の優等賞

- を得る。
- 1888 20歳。インドと東洋の宗教を学ぶため、イギリスの神智学協会のロンドンの宿舎でインド、中国の文学や哲学を学ぶ。パリに戻り、ソルボヌ大学、コレージュ・ド・フランスでエヅワール・フーコー教授のもとでサンスクリット語やチベット語を学ぶ。
- 1890 親族から遺産を相続。初めてインド旅行。コロンボに上陸。ベナレスで老苦行者と出会い、数か月間修行の指導を受ける。帰国後オペラ歌手として生計を立てる。
- 1900 チュニスのオペラ座との契約を得、チュニスに転居。そこで鉄道のフランス人技師のフィリップ・ネールと出会う。(1862-1941)
- 1904 フィリップ・ネールと結婚。チュニスの新居に留まったのは数年間だけで、結婚一週間後から旅を始めた。フィリップとの結婚が無ければ、アレクサンドラのインド、ラサ、アジア旅行は実現しなかつただろう。フィリップが他界する1941までの37年間、二人は文通が続けたが、殆ど一緒に生活することが無かつた。
- 1910 ブリュッセル新大学で東洋哲学を教え、『仏教の近代主義とブッダの仏教』を出版。
- 1911 フランス政府から給費を得てインドに出発。13年間アジアに留まる。
- 1912 カリンポン亡命中のダライ・ラマに謁見。寺を訪れ、チベット文献を読み、高僧に学ぶ。
生涯の旅の道づれの少年僧、アプル・ヨンデンと出会う。彼は15歳でアレクサンドラに弟子入り。後に養子となる。
〔ヨンデンは1955年、56歳で南仏にて死去。フランスの生活に馴染めず、死去したころはアル中に〕
- 1914-16 シッキムの3900メートルの急斜面にある洞窟で、厳しい修行生活を送る。チベット語、密教修行者の生活、教義、信仰、叙述の儀式、瞑想の方法を会得。体内熱と呼ばれる秘術を訓練。同年チベット領に初めて越境。
- 2016 シガツェに到達。タシルンポ寺にいるタシラマと面会。無断でのチベット入国のかどで、イギリス当局によりシッキムからの退去を命じられる。このことがラサ行きを決意する大きな動機となる。
- 1917 カルカッタからビルマに入り、日本へ。6か月間鎌倉や京都に滞在し、河口慧海と再会。？



- 北京から中国を旅して、
- 1918 アムドのクムブム寺で3年間滞在、般若経を研究。
- 1921-1922 ゴビ砂漠とモンゴルを探検。
- 1923 秋 雲南省の一村に到着。ラサ行きの旅の始まり。
- 1924 2月 ラサ到着。
5月 ギャンツェに戻る。
- 1925 5月 フランス帰国。熱狂的に迎えらる。パリで3回の記念講演。ギメ美術館で講演。
- 1927 「パリ・ジェヌヌのラサ旅行」をフランス語と英語で出版、大きな反響を得た。
- 1928 南仏ディニュ転居、「サムテン・ゾン」(瞑想の館)を建て、執筆に専念する。
- 1937 69歳で2度目のアジア大旅行。モスクワからシベリア鉄道で北京へ向かう。
6月 五台山のチベット僧院に滞在。戦時下で五台山から太原、石家荘、武漢、成都、タチェンル(康定)と旅をする。戦乱のため、タチェンルで道が閉ざされ7年間滞在する。
- 1941 夫フィリップ・ネール死去の知らせを受ける。
- 1944 タンチェンルで7年間の滞在終了。この間チベット苦行者の教義に関する資料を収集。
- 1946 ダージリング・カルカッタ経由でフランス、ディニュに戻る。
78歳。
- 1955 ヨンデン、ディニュで死去。
- 1969 100歳10か月、ディニュの瞑想の館で死去。



■旅の概要



この旅行記に書かれた旅は、アレクサンドラが14年間アジアに滞在していた頃の一コマ。1923年10月雲南省のツェズロン村を出発、チベット国境を越え、1924年2月にラサに到着、ラサに2か月間滞在したのち、イギリス通商部があるギャンツェで終わる、8か月間に及ぶ旅行記。

同行者はシッキムの寺で出会った少年僧、アプル・ヨンデン。この時アレクサンドラは54歳、ヨンデンは25歳。チベット人の老婆に扮し、徒歩で息子のラマ僧と托鉢の巡礼旅行という設定でラサをめざす。

チベット語が堪能で仏教に造詣が深く、また同行し

ているヨンデンもラマ僧としての教育を受けているだけではなく、父親も著名な赤帽派のラマ僧でもあったので、道中は村人に占いをするようにせがまれ、托鉢で食糧を確保しながらの旅。

山奥に入るまでは夜間に移動、昼間は洞窟とか茂みの中に隠れ、人目を避けた。旅の途中からは各地の農家に泊めてもらっている。



◆服装と変装

巡礼乞食に扮した。

アレクサンドラはチベット服を着て、炭の粉とココアの粉を混ぜあわせて顔に黒く塗り付けていた。時には鍋底の焦げ跡で顔を真っ黒に塗った。

栗色の髪の毛を中国の黒墨で染めて、ヤクのひげを編み込んで、チベットの老婆に扮した。そのため、白い肌をさらけ出すことができないので、人前で用を足すこともできず、人家に泊まる時は朝暗いうちに用をすませた。うっかり食器をあらって、白い肌を曝したりして、危うく外国人であることがばれそうになる一幕も。

貧乏な托鉢僧の親子に扮していたからこそ、チベット庶民の生活や風習をつぶさに見て、報告しているので、非常に興味深い内容の本になっている。



◆暗号

チベット仏教の修行を経験していることから、お経を唱えることができ、ヨンデンとの間でお経を暗号のように使ってお互いに危険を知らせたり、群集の中で意思の疎通を図った。

◆持ち物

薄い綿製の小型テント、鉄製の杖とロープ、長靴を修理するための大きななめしていない一枚の皮、地面に寝るときのための一枚の厚い布、短刀、、ピストル、小さいコンパス(羅針盤)、。2-3週間分の食糧。主にバター、ツァンパ、乾燥肉、お茶、ストリキニーネ錠剤。調理道具は 匙、箸二膳、鍋一個、木製の椀一個とアルミ製の椀一個。金、銀、証明書、温度計、小さいコンパス時計、拳銃を帯を服の下に付けた。

◆著者のラサ紀行の動機

5度目のチベット入域

1912年4月にカリンポンに亡命中のダライラマに謁見、それ以来チベットに強い憧れをいだき、数回入域を試みるも、越境すると見つかり、追い返されていた。ラサへ入域したい動機はチベット仏教の教えを深めることと、イギリス政府役人が勝手に歩き回っているのに、自分の行動を制限していることに腹が立ち、対抗するため。



ダライラマ13世トポタン・ギャムツォ (1876-1933)

◆著者の性格

体は非常に丈夫。最初は76歳の老婆に扮していたが、歯がそろっていたので年齢を疑う女性が現れ、急遽年齢を56歳に下げた。

「どんな経緯であっても、また相手が誰であっても、自分は敗北したとは思わないことを主義にしている。」(p.24)

「気分がどんなに落ち込んでいても、食欲が無くなったり、眠れなかったことは一度もない。」

◆チベット人の風習

- 巡礼者に親切にすることは仏教徒の務め。だから、集落を通過すると2-3日分の食糧を確保できる。しかし、一旦巡礼者を目にすれば、布施を与えなければならないので、農村を通過中、時には住民はあわてて、窓を閉め、みて見ぬふりをすることがある。
- 巡礼者、とりわけ、ラマ僧に間違っただ道を故意に教えたと天罰がある。
- カースト制はないが、鍛冶屋、肉屋、浮浪者、乞食、旅行者は穢れ人。
- 旅行者はいつも背後に一匹か数匹の悪魔を引き連れていることになっている。
- バター茶を一日16杯飲む。ツァンパ。
- チベットでは高位の聖職者は火葬台の変わりにバターの入ったお大釜の中で死体を焼く。火葬にするための燃料がないため。大部分は鳥葬。

■本書の内容

【序章】

旅に出かけた背景、動機、いままでのチベット入域経験などを記載。チベット探検の先達にも言及している。

【第一章 チベット国境を超える】

ツエズロンを出発。

ロンドレ村一昼ころに通過した村。

メコン川のゴルジェ入口で夜を明かす。メコン川左岸を遡りドカル峠をめざす。

カ・カルポ山が遠望できる地域。聖地カ・カルポ山はチベットと中国の境界ドカル峠(5412m)越え—サルウェン川河畔へ向かう。(美しいお城と庭園の村の幻覚を見る。)

ラカンガラ川沿いのアペン村へ向かう。途中カ・カルポ山の森林地帯のはずれに達した。

アペン村夜間通過。ラカンガラ村へ。

10日目サルウェン川を見下ろす場所へ



達する。名の無い集落に到着。ヨンデンが葬式を取り仕切る。地元の僧がお経が読めず、ヨンデンに頼み込んだため。

【第二章 カ・カルポ山を離れ、巡礼団に会う】

1 1月。カ・カルポから離れる。サルウェン川沿いの美しい村々を通過。(ジャモ・ヌ・チェ河)。タナー(国境警備隊がいる村)。寺の付近に来ると、多くの番犬が激しく吠えた。大声わめきなら通過。(足が痛くて殆ど歩けない。泊めてくれ！と。なんと皆は冷酷だ)

ある日、村からぶんぶんという音が聞こえてきた。農作業をしている農夫が低い声で皆呪文を唱えていたので蜂の巣の近くにいるような感じ。

トンド峠(3360m)越える。

ヌ・チェ川がサルウェン川と合流する地点を見る。片持ち梁の橋でヌ・チェ川を渡る。

片足が腫れ上がって今にも巡礼団から置き去りされそうな少女をヨンデンが占いをして助ける。実際置き去りにされ、瀕死の状態の老人を目撃している。

ケ村。急斜面の頂上付近。

2200mの峠を越える。月光のもと夜中歩く。睡魔。

ワボ村。分岐点。一本はカ・カルポ山脈の北側を回って中国へ向かう道。もう一本はヌ・チェ川の谷の奥へ向かっている道。

ここで村人が集まってきて、大勢の目の前でうっかり食器を洗っているところを見られた。チベット人は青色や灰色の目、灰色の髪と称している金髪はもっとも醜悪なものである。急いで鍋底の煤を手塗ってごまかす。モンゴル人だと思われた。

もう一度山脈を越える。トン・ラ峠(3100m)を越える。森から中国方面へ流れている川の美しい谷に入る。谷は畑。

バタンへ向かう。ヌ・チェ溪谷から出て、未開墾の広大な野原にでる。

ト峠への道。



【第三章 美しいヌ・チュの谷に行く】

ク峠麓の村で食糧買い、夜中にク峠を越える。付近盗賊多し。略奪集団に会うが、食糧を恵んでくれる。

温泉に入る。チベット人家族が入ると非常に汚れる。

ダユル寺(テウ)をめざす。総督の使いである二人の僧と会い執拗にみられるので、別れてからいつまでも消えない恐怖心に悩まされる。

ポラン村近くのヌ・チェ川に架かった橋に至る。ポラン村通過。食糧を買わず川を渡り小道を進む。夜姉妹の家に泊めてもらう。

翌日カ・ラ峠を越え、ヌ・チエ谷から離れる。

不毛地帯に入る。

パン峠。

シャモ・ヌ・チェ川

ツァワ村が対岸にあり、縄の橋で渡るが途中でロープが切れる。宙ぶらりん。地元の少女と一緒に鉤（ホック）に縛り付けられていたが、切れたロープを岸にいる男たちがひっぱりあげるたびに大きく揺れる。川の激流から50m位の高さ。一緒にいる少女は発狂。「私の精神は強靱」



【第四章 サルウェン川に沿った村々】

ツァワ村に滞在せず。

サルウェン川を遡る。いままで通過した谷よりも人口が多かった。

支脈は川床の近くで絶壁で、サルウェン川の谷を横切っていた。それをいちいち越えなくてはならない。

一行程ごとに数百メートルを登らなくてはならない。

ウベ村

ダンシヌ郡に近い小村

セポ・カン峠を目指す。途中奇岩が立ち並ぶ荒涼とした山岳地帯。

セポ寺に至る。

ダンシヌ川流域に入る。大寺院あり。谷間の大部分は耕作地で美しい。村が裕福

病気で死んだ動物の内臓料理。チベット人は家畜を殺すと胃袋に腎臓、肝臓、心臓などの内臓を詰め込み、それを縫い合わせ、数週間漬け込む。

悪臭はなはだしい、吐き気がする。具合悪いふりをして食事を辞退。

【第五章 大氷河とデウ峠を越える】

12月

タシ・ツエ村。(繁栄している山頂、繁栄の頂点という意味) 広い谷底にある村なので、後者の解釈。

「ポ人の国へ行くには谷沿いの道と山中に入る路の二つがある。山中の道には全く人家がなく、非常に高い峰を二つ越えなくてはならない。盗賊も多い。」と聞く。

二つの道はラサへ向かう谷の道で合流する。谷沿いの道は地図にあり、この谷についてイギリス将校ジョージ・ペリーラから以前聞いていた。ポ地方にはまだ探検家のだれもが通ったことは無いと将校から聞かされたことが後者のルートを選ぶ動機になった。

暗闇で川を渡るところを見失い、腰までつかほどの深い川を徒渉。いくつかの山を越えると数件の家畜小屋を見つけそこで、寝る。

翌日急な山の斜面を登り、高台に着くと左側は「廣大無辺な雪原があり、遙か遠いこの台地の果てには青緑色の氷河と純白な雪を戴いた峰々の絶壁が見えた。」

右側は「二つの低い山並みに取り囲まれている広い波打った台地が緩やかに登っていて、地平線で周りに聳えている峰々の尾根と一直線となっていた。」正面の方向も広大な大地。どちらの方向に向かって道を取るべきか全く分からない状態。すでに日が暮れようとしていたので危険な状態に陥る。しばらくしたて、ようやく峠だと知らせるケルンの旗が風ではためいている場所に到着。アレクサンドラの方が歩くのが早く、かなり遅れて山を登るヨンデンの姿をみて、彼をこの冒険に引っ張り込んだことを悲しみ、一瞬罪悪感にさいなまれる。夜月光に照らされた雪原を進む。

この時越えたのはデウ峠。5500m前後。到着した谷底は氷におおわれていた。19時間休まず歩いた。のどの渇き、空腹を我慢、ただ睡魔に悩まされた。

ある谷で野営。もっていた火打石が湿って火を起こせない。そこでアレクサンドラ体温を高めるチベット式の秘術ツモ・レキャンを使う。

ヨンデンが燃やす木を探しに行っている間に火打石を懐に入れてこの秘術をする。「やがて炎が私を取り囲んで立ち上がってくるのが見えた。それは次第に高くなって、私を包みこみ、赤い火炎が私の頭上に垂れ下がってきた。私は恍惚とした気持ちになった。体は焼けるように暑かった。火打石を取りだし、打ったら強い火花が起こった」

デウ峠を降りた麓の谷を去り、さらに広い谷に出た。一見の小屋を見つけるがその住民に泊めてもらわず、そのまま進む。

エグニ峠への案内人を頼む。その人の家で一泊するが、そのために川を徒渉しなければならない。ブーツを脱ぐと白い足を曝すことになり疑われる。そこでリューマチ患っていると言い、案内人が川の渡渉の際、背中に負ぶってくれることになった。しかし、アレクサンドラは拳銃と帯に金と銀を大量に隠し持っていて、体重が異常に重くなっていることに気付く。蚤を捜すふりをして拳銃、帯を脇の下に移す。このガイドが強盗に変身しそうになるが、ヨンデンに助けられる。

【第六章 ポ・ツァンボ川源流を探検する】

エグニ峠越え。三つの大きい谷の合流点に下る。ブラマプトラの支流であるポ・ツァンボ川の源流はコン・ツォン峠が源頭。大雪の中、ポー川の源流付近を探検。洞窟を見つけ二日ぶりに寝る。ヨンデン窪地に滑落、足首を捻挫。膝打撲傷。アレクサンドラ背負って窪地からヨンデンを運ぶ。

アレクサンドラの靴の底に穴発見。

12月22日羊飼いの夏の野営地につく。長靴に穴が開いてしまったので、アレクサンド

ラも凍傷で歩行困難に。靴を修理して村へ向かうが雪が降りしきる森の中ですっかり道を見失う。数日来絶食状態。ヨンデンは松葉杖で歩き、アレクサンドラも凍傷で早く歩けない。先の夏の野営地に戻る。ヨンデン高熱で盛んに雪の中を出発しようとするのをアレクサンドラが止める。大きい火を起こすとヨンデンは寝て、次に目を覚ました時は、錯乱状態から正常な状態にもどっていた。



食事は雪を溶かして出来た湯に、長靴の底に防水を施すために張り付けてあったベーコンと、長靴を修理するために縫い付けた新しい皮の切れ端を入れたスープ。翌日谷を下ると山小屋に着くとポー地方の男が一人小屋の外にいた。中に入るとさらに総勢16人の男がいた。

この山小屋で遭遇した男たちの正体を知る。チュゾン村の人々。村人はラサから徴税のために派遣されたチベット政府の高官を石で追い払い、その高官が逃げ込んだ館を取り囲んでしまった。この出来事をラサに伝えるために高官は密使を急遽送っていた。村人は報復を恐れ、ポ地方の境界の峠に向かう幾本かの道に仲間を差し向け、手紙を横取りし、密使を探しだして殺すことになっていた。彼らはヨンデンに密使が見つかるかどうかについての占いを頼む。絶食6日目でようやくお茶とバターをもらったあと、男たちは去った。

チョロク村。ポ地方に入る。托鉢して回る。二日分の食糧を調達。先へ進むが、次の村までは盗賊がはびこる危険な地域。三つの谷の合流点に到着。この地域が反乱を起こしたらしいことを知る。反乱を起こしたチ・ゾン村でとらえられていた高官は上手く逃げてス・ゾン村のラマ寺院に避難していた。この地方を急いでやり過ごすことに。広い田園地帯に出た。村々を通過するたびに人はあわてて戸や窓を閉める。ラマ僧に施すものが無い程貧しいから見ないふりをしている。最後の裕福な農家に泊めてもらう。

【第七章 ポ地方の人々】

ス・ゾン村

全カンギュル（サンスクリット語から翻訳されたチベットの聖典）の読経が近辺の村で行われて、108巻からなるその聖典が、農夫たちの引く数頭のヤクの背に積まれ、寺に返すために運ばれていた。大きいラマ寺で食糧を調達。

ポルン・ツァンポ川上流域。ヨーロッパ人未踏の地。

道中木の根元、洞窟で寝る。人里離れた農家を通過する時、獐猛な犬には杖を振り回ししばしば戦う。河に沿った道筋を選んで進む。

この地方最大の町、ダシンへ向かう。ダシン村のはずれに複数の隠者の庵岩の壁にあった。そこで大きな巡礼団に遭遇。ラサからの帰途。

ダシン寺でヨンデンは食糧調達。ダシン寺は谷間にあり、黄金色。寺の後ろは広い谷が開き、南部チベットへ向かう一本の道。ポルン・ツァンポ川の右岸にはダシン近くで、山脈を横切って北方に向かうもう一本の道筋が発していた。その道はラサからチャムドへ通じる郵便道に連絡。さらに先は分岐して数本の道がある。その一本がラサへ茶を運ぶ、チベットの中

心地ジェクンドへ通じる。

ショワ（ポ低地地方の首都）に元旦到着。（ラサは中国暦、ここはそれより一か月早い正月）王宮の門をくぐり大きな声でお経を唱えて、たくさんの食糧を調達。

ポルンツァンポ川を屋根付きの橋で渡る。両端に見張り番の小屋。橋には絵や魔術の言葉が係れたおびただし数の紙や紙を束ねた旗がほうぼうに飾ってあった。

新年を農家で祝う。周辺に開墾のために入植した農家多数。

毎日ツァンパばかりを食べている食事は一種の厳しい苦行。泊めてもらったある農家では大きな生地を練って、杏子の種から絞った油で、その生地を揚げたガレットを沢山もらう。

ポ地方の住民は強盗であるという悪評があるので隊商や単独の旅行者はこの地方を横切る路を行かない。この地方の巡礼のみが危険を承知でここを通るということだった。ガレット

をもらった村を出発してその夜洞窟を見つけ、あまりにも快適なので寝過ごしてしまう。美味しいチーズを持っている男が来て、アレクサンドラの開いている袋の中の匙を見つけ

てしまう。そして一旦消えたと思うもう一人の男を引き連れて戻ってきて、スプーンを盗みテントを奪い取ろうとした。アレクサンドラは拳銃を発砲。二人は匙とテントを置いて

逃げる。そこに爆音を聞いた30人くらいの巡礼団が来て、助かる。ヌ谷のゾゴンから来ていた巡礼団と合流。盗賊から無事逃れる。二日間この陽気な巡礼団と過ごす。

トン・メ村

ポルン・ツァンポ川とイゴン・ツァンポ川の合流近く。イゴン・ツァンポ川を渡る。ケーブルで宙吊りになった橋を渡る際、10人以上いる渡し守の助け必要。彼らはまず軽業で

対岸に渡る。まず荷物を対岸へ渡してから人間。ロープに結び付けられて渡る。ギャルワ・ペリ山（7000m）が橋周辺から見える。川を渡った先の森は熱帯のような密林。洞窟

で一夜を過ごす。巡礼団はとっくに出發して、また二人きりになる。道筋複数。コンブ地方經由ラサへ行く道を見つける。

起伏の多い巨岩が遮る路は近道で、やがて驢馬道に合流。1月なのに、道端にランの花を見つける。間もなく野営している先日まで一緒だった巡礼団に会い、彼らが正規の道で強

盗団に襲われたことを知る。野営地の近くの村人が偵察に来た。巡礼団を略奪できるかどうかを調べに来ていたのかと疑った。しかし、村人は翌日バター、ドライドフルーツ、ピーマンひとかごを持ってきて、ヨンデンに祝福の儀を取り計らってもらった。

【第八章 七人の強盗と二人のラマ僧】

トンギュク村。

一日歩き、夜トンギュク川のほとりで休んだ。すると山の下の方から7人の男が登ってきてヨンデンを囲み、懐からまず2ルピーを盗み、次に持ち物を去ろうと

する。持ち物には外国製のものが入っているので持ち去られると危険。そこでアレクサンドラはチベットの神々の名前を叫び呪文を唱えると、強盗達は恐れおののき、2ルピーを返し、去って行った。

トンギュクには2本の街道があり、ラサへ行く旅行者を取り調べるための館がある。それより下流に出る道を進む。

トンギュク川はポ・ツァンポ川と下流で合流。橋があるが検問所の許可書がないと通行できない。橋の反対側には見張り番の小屋があり、監視番がいたが、先に通行したはずの巡

礼団のはぐれた一員であると話し、一計を案じ、無事通過。(アレクサンドラが関所の町に行き、高官にチベットコインの賄賂を払う)

ジャムダ。コンブ地方の首都。コンブ南路へゆく。森林地帯。しかしイゴン・ツァンポ川のような亜熱帯の密林ではない。気温が低く川は凍っている。

風変りな歌を歌う女性たちが、男が伐採した木材を一本ずつ引いていた。森林地帯を抜けるとアルプスのような風景。村が散在していた。牧場。

テモ峠を越え、ブラフマプトラ川へ向かって迂回する森林の続く下り道経由、テモ村到着。この時期タシ・パンチェンラマは中国に逃亡したことを知る。

ブラフマプトラを取り囲む高い峰々の風景にすっかり魅了される。

道筋にはボン教の聖地の一つ、コン・ブ・ボン・リ山があり、五体投地をして聖山を巡っている巡礼者多数。

ジャムダ川を遡るがこの地方は荒廃している。人のいなくなった村々が廃墟に、耕作地は草が生い茂っていた。

チェマゾン通過。置き去りにされた二人の女性巡礼者に会う。最初の女巡礼者は同行することを拒否。二人目は病気だが、村人は毎日食事を与えていた。

ジャムダ。(3300m) ラサへ行く街道とブラフマプトラへ下る街道の分岐。商業、軍事の要衝。谷は温暖。1月の日中18度の気温。

ジャムダからラサ方面へ行くには橋を渡る。通行税が徴収される。これでラサへ直接通じるチベット唯一の郵便道に出た。

数マイルごとに礼拝堂に似た建物があり、礼拝の対象になっていた。

コンブのパ峠を越えた時、分裂した巡礼団の顛末を知る。片方が強盗団になり、残りの巡礼者を襲い、死傷させたうえ、金品を盗んだ。これを取り締まることが出来ないほど、チベットは当時荒れていた。

【第九章 ラサで正月を祝う】

ドチェンを夜明けに出発。ラサまでの最後の行程。ポタラ宮を遠望する。

キチェ川を渡りラサの域内に入る。下船すると激しい嵐。「この自然現象は私の身の安全が完全に約束された象徴だと私は理解した」

新年の祭りのために各地から人が集まり、全ての宿は満員。親切な女性が紹介してくれた宿は、ラサ町はずれのあばら家の一室。ヨンデンと勝利を祝う。



ポタラ宮殿を見物。その時アレクサンドラは入口で小僧に帽子を取ることを命ぜられる。髪の毛を染める中国式の墨はとくに切れてしまい、ラサでも髪の毛を染めていなかったの、栗色に髪の毛の色が戻っていた。ヤクのたてがみでつくられた黒いおさげの付け髪とも色が合わなくなっていた。とうとう発見さ

れてしまうのではと恐れたが、誰も気に留めず、無事ポタラ宮殿の屋上まで見物できた。そこですれ違った一人の巡礼者はアレクサンドラの異様な姿に気が付くが、すぐに「あれはラダキだ」と言った。ラサのバザールでは粗悪な綿織物、俗悪な陶器類、アルミニウム製の台所用品、安物の輸入品が売られていた。ラサではすでに銀貨がなくなっていた。ラサ政府が鑄造していた銅貨は首都と、ごく限られた地域で使用されていた。中国領のチベットではチベット銀貨は流通しているのに、チベット領の中央部では全く流通していなかった。



徴税も厳しく、税負担も増えていた。

ラサでは毎年1月に祭が行われる。5メートルの高さの台木に色つけされたバターの飾り

ものが一杯につけられ、同じようにバターで作られた色とりどりの神々、人、動物、などの人形も付けられる。その大きな飾りつけはトルマと呼ばれ。各トルマの前にはバターを燃料とした燭台（しょくだい）が置かれる。夜祭である。

100基ほどのトルマはジョカン寺を巡る巡礼道の「中央円」に建てられる。ダライラマのお出ましを待つ群集に交じって見物。祭りが終わりあばら家に戻る途中、月食を見る。素朴な人々は月を飲み込んでしまおうとしている龍を追い払うために、鍋やその他の台所用品を叩き始めた。



「ポタラ宮の前の大通りはインドを起点にモンゴルを通過し、シベリアに至る道である。何時の日か、アジア縦断の急行列車が、豪華な客車に乗った旅人達を快適に運んでここを通過する日が来るかもしれないが、その時にはこの旅行の魅力は殆ど失われてしまうでしょう。私は、セイロン島からモンゴルまで旅をしたので、本当に嬉しいと思う」

著作目録

I アレクサンドラ・ダヴィッド＝ネール著作目録

1. *Pour la Vie*, Bruxelles, Belgique, Bibliothèque des Temps Nouveaux, 1898. 下記 28. *En Chine* (Paris, Plon, 1970) 中に再録。
2. *Le Philosophe Men-ti (ou Mo-tse) et l'idée de solidarité*, Londres, Luzac et Cie, 1907; パリからは *Socialisme chinois, Men-ti et l'idée de solidarité* (Paris, Giard et Brière, 1907) として出版。下記 28. *En Chine* (Paris, Plon, 1970) 中に再録。
3. *Les Théories individualistes dans la philosophie chinoise*, Paris, Giard et Brière, 1909. 下記 28. *En Chine* (Paris, Plon, 1970) 中に再録。
4. *Le modernisme bouddhiste et le bouddhisme du Bouddha*, Paris, Alcan, 1911. *Le Bouddhisme du Bouddha* という題で再版 (Paris, Éditions du Rocher, 1977)。
5. *Souvenir d'une Parisienne au Tibet*, Pékin, 出版社不明, 1925.
6. *Voyage d'une Parisienne à Lhassa, à pied et en mandiant de la Chine à l'Inde à travers le Tibet*, Paris, Plon, 1927.
7. *Mystiques et Magiciens du Tibet*, préface de A. d'Arsonval, membre de l'Académie des sciences, Paris, Plon, 1929.

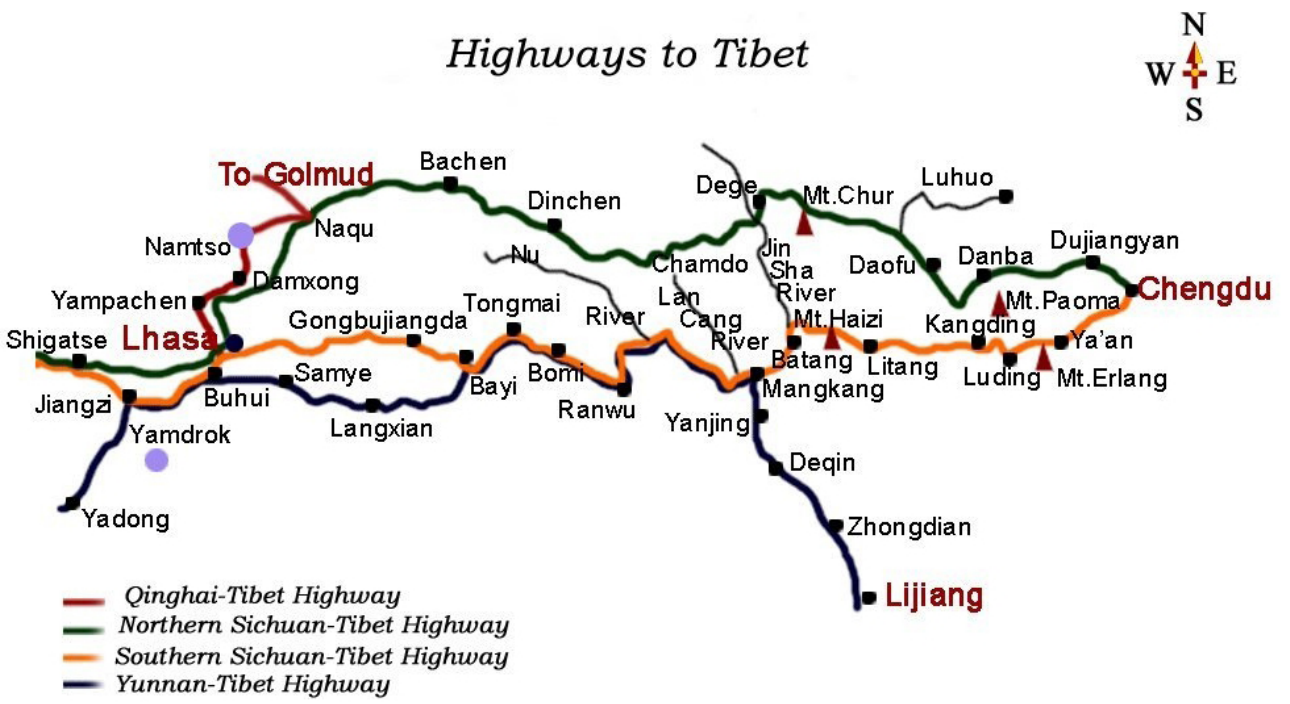
8. *Initiation lamaïque. Des théories, des pratiques, des hommes*, Paris, Adyar, 1930.
9. *La vie surhumaine de Guésar de Ling, le héros tibétain, racontée par les bardes de son pays*, ラマ Yongden との共著, Paris, Adyar, 1931. *La vie surhumaine de Guésar de Ling* の題で再版 (Paris, Le Rocher, 1978)。
10. *Aux Pays des Brigands gentils hommes. Grand Tibet*, Paris, Plon, 1933.
11. *Le Lama aux cinq sages, roman tibétain* (ラマ Yongden との共著), Paris, Plon, 1935.
12. *Magie d'Amour et Magie Noire. Scènes du Tibet inconnu*, Paris, Plon, 1938.
13. *Sous des Nuées d'orage*, Paris, Plon, 1940.
14. *A l'ouest barbare de la vaste Chine*, Paris, Plon, 1947.
15. *Au Coeur des Himalayas, Le Népal*, Bruxelles, Dassart, 1949. 再版: Paris, Pygmarion, 1978.
16. *L'Inde. H, aujourd'hui, demain*, Paris, Plon, 1951.
17. *Astavakra Gîtâ, Discours sur le Vedânta advaita, (traduit du sanscrit)*, Paris, Adyar, 1951.
18. *Les Enseignements secrets des Bouddhistes tibétains, La vue pénétrante*, Paris, Adyar, 1951.
19. *Textes tibétains inédits traduits et présentés par A. David-Néel*, Paris, La Colombe, 1952. 再版: Paris, Pygmarion-Gérard Watelet, 1977.
20. *Le Vieux Tibet face à la Chine nouvelle*, Paris, Plon, 1953.

33. *Astravakra Gītā - Avadhuta Gītā* (上記17. と23. を合わせての再版), Paris, Le Rocher, 1979.
34. *Le Lampe de Sagesse*, Paris, Le Rocher, 1986. Jean-Paul Bertrand 編。
35. *Sodétchen l'invisible, conte tibétain*, illustrations de M. Mille, Digne Les Bains, Fondation A. David-Néel, 1990.
36. *Grand Tibet et Vaste Chine, Récits et Aventures* (上記1, 10, 13, 14, 20. の5著作を合わせての再版), Paris, Plon, 1994.
37. *Pour la Vie et autres textes libertaires inédits 1895-1907*, Paris, Les nuits rouges, 1998. (1. の再版とその他の未出版稿を合わせる)

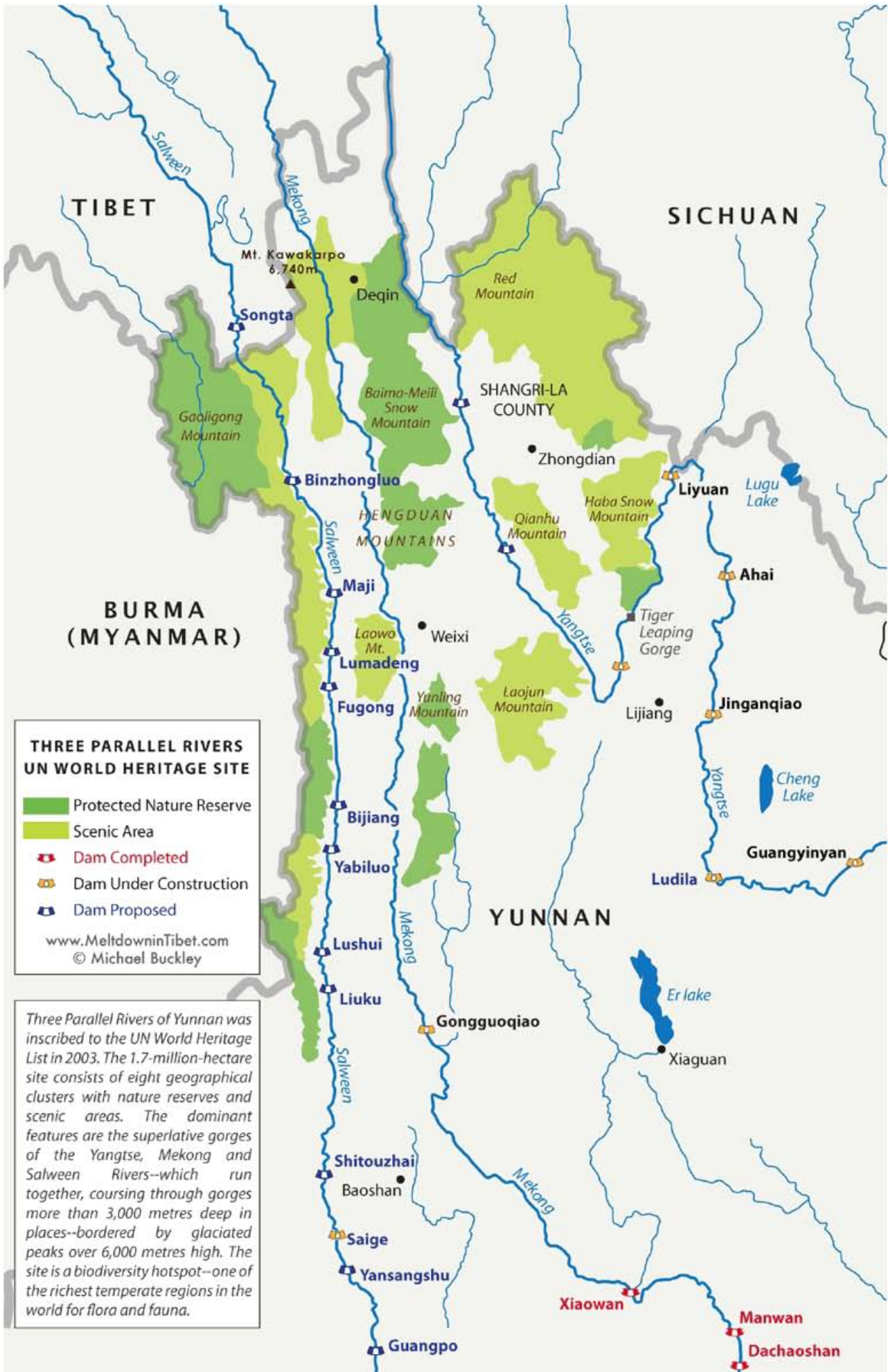
II アレクサンドラ・ダヴィッド＝ネールに関する著作 目録

1. *Alexandra David-Néel, Aventure et spiritualité*, Jacques Bross, Paris, Albin Michel, 1978.
2. *Le Tibet d'Alexandra David-Néel - album photos* (写真集), F. Borin, Paris, Plon, 1979.
3. *Le Lumineux Destin d'Alexandra David-Néel*, Jean Chalon, Paris, Librairie Académique Perrin, 1985.
4. *Alexandra David-Néel, Voyages et aventures de l'esprit*, Jean Mouttapa et Marc de Smedt, Paris, Albin Michel, 1985.
5. *Sept femmes au Tibet*, Marie Jaoul de Pon-

21. *La Puissance du néant* (ラマ Yongden との共著), Paris, Plon, 1954.
22. *La Connaissance transcendante d'après le texte et les commentaires tibétains*, Paris, Adyar, 1958.
23. *Avadhuta Gītā de Dattatraya. Poème mystique Vedānta advaita*, Paris, Adyar, 1958.
24. *Le Bouddhisme du Boudidha, ses doctrines, ses méthodes, et ses développements mahayanistes et tantriques au Tibet*, Paris, Plon, 1960. 再版: Paris, Éditions du Rocher, 1977, 1989.
25. *Immortalité et réincarnation. Doctrines et pratiques. Chine, Tibet, Inde*, Paris, Plon, 1961.
26. *Quarante siècles d'expansion chinoise*, Genève-Paris, La Palatine, 1964.
27. *L'Inde où j'ai vécu. Avant et après l'indépendance* (16. *L'Inde. Hier, aujourd'hui, demain* の増補改定版), Paris, Plon, 1969.
28. *En Chine. L'amour universel et l'individualisme intégral. Les Maîtres Mo-Tsé et Yang-tchou*, Paris, Plon, 1970.
29. *Le Sortilège du Mystère*. Paris, Plon, 1972.
30. *Journal de voyage 1. Lettres à son mari (11 août 1904-27 décembre 1917)*, Paris, Plon, 1975.
31. *Vivre au Tibet. Cuisine, traditions et images*, Morel éd., 1975. *Gargantua au pays des neiges* の題で再版 (Éd. Dharma, 1993)。
32. *Journal de voyage 2. Lettres à son mari (14 janvier 1918-3 décembre 1940)*, Paris, Plon, 1976.



- cheville, Paris, Albin Michel, 1990.
6. *Dix ans avec Alexandra David-Néel*, Marie-Madeleine Peyronnet, Digne Les Bains, Fondation Alexandra David-Néel, 1992.
 7. *Les Itinéraires d'Alexandra David-Néel*, Joël Désiré-Marchand, Paris, Arthaud, 1996.
 8. *Alexandra David-Néel, "La femme aux semelles de vent"*, CD-ROM, Fondation Alexandra David-Néel, Paris, Plon, 1996.
 9. *Alexandra David-Néel, De Paris à Lhasa, de l'aventure à la sagesse* (写真集), Joëlle Désiré-Marchand, Paris, Arthaud, 1997.





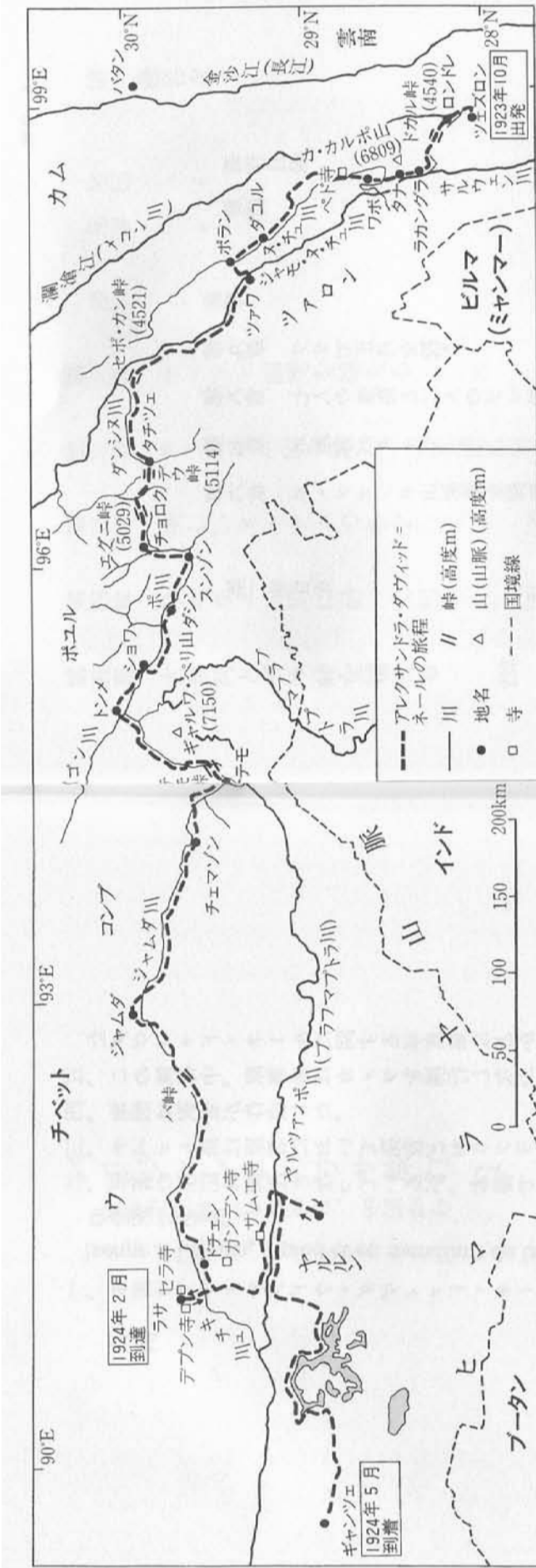
三大河川地帯の模型

左右とも ツァン地方の王女



コルと呼ばれる髪型をしたツァン地方の王女。





アレクサンドラ・ダヴィッド=ネール ラサ旅行行程図
 雲南-ラサ：1923年10月-1924年2月
 ラサ-ギャンツェ：1924年4月-1924年5月

◆時代背景

- 1911年 孫文率いる辛亥革命起こる。
- 1912年 清朝崩壊
- 1913年 インド亡命中のダライ・ラマ（XIII世）帰国。チベット独立
- 1913-14年 シムラ協定により、大英帝国南チベット併合。マクマホン・ライン
ダライ・ラマは次第に内向きとなり、中国と国境を接している東部チベットでは過酷な税の取り立て、盗賊が支配する地域になった。
- 1908-18年 中国の守備隊はカムにおり、地元の王子はその司令官に従属。
- 1951年 中華人民共和国によって併合される。ダライラマXIV世亡命
- 1923年 パンチェン・ラマ、イギリスの近代化政策に反対。中国に亡命

◆探検史

- 1826-41年 ムーアクロフト、カシミール人に扮して12年間ラサ滞在、殺害される。
- 1845-45年 Huc and Gabet、アムドのクンブム僧院、ラサなどに滞在
- 1865年 パンディット Nain Singh ラダク人に扮してシガツェ、ラサ、カイラス入域
- 1870-72年 ブルジェワルスキー、初めてココノールとツアイダム盆地に足を踏み入れる。
- 1878-82年 パンディット Rai Bahadur Kishen Singh、一年間ラサ滞在。キャラバン隊に同行してツアイダム盆地、カム、バタンを探索、ツアンポー川経由でインドに帰国。
- 1884-85年 ブルジェワルスキー、3度目のチベット探検
- 1889年 イザベラ・バード、ラダクとヌブラに入域
- 1892-93年 アニ・ロイル・テイラー 宣教師。シッキムで仏教を学び、グゲまで到達
- 1895年 宣教師の Dr. Susie C. Rijnhart クンブム入り。しかしラサに到達していない。
- 1901-03年 川口慧海3年間チベット滞在。
- 1903-04年 ヤングハズバンドはカーゾン総督の命で、シッキム政務官のジョン・クロード・ホワイト及びアニー・ロイル・テイラーとともにチベット探検に乗り出した。しかしこれはシッキム＝チベット間の国境問題を解決するための、中央の指示を超えた「侵攻」になってしまった？**
チベット国境から100キロほど行ったギャンツェへの道中、探検隊は地元のチベット人と対立し、チベット人民兵が600人から700人の住民を虐殺する惨事へと発展した。死傷者の数には諸説あり、イギリス側の犠牲者5人に対して5000人のチベット人が殺されたとする推計もある（ウィキペディア）
- 1914-16年 アレクサンダー・ダビッド・ネール、シッキム滞在。ダライラマ謁見
- 1923-24年 アレクサンダー・ダビッド・ネール、女性として初めてラサ到達。

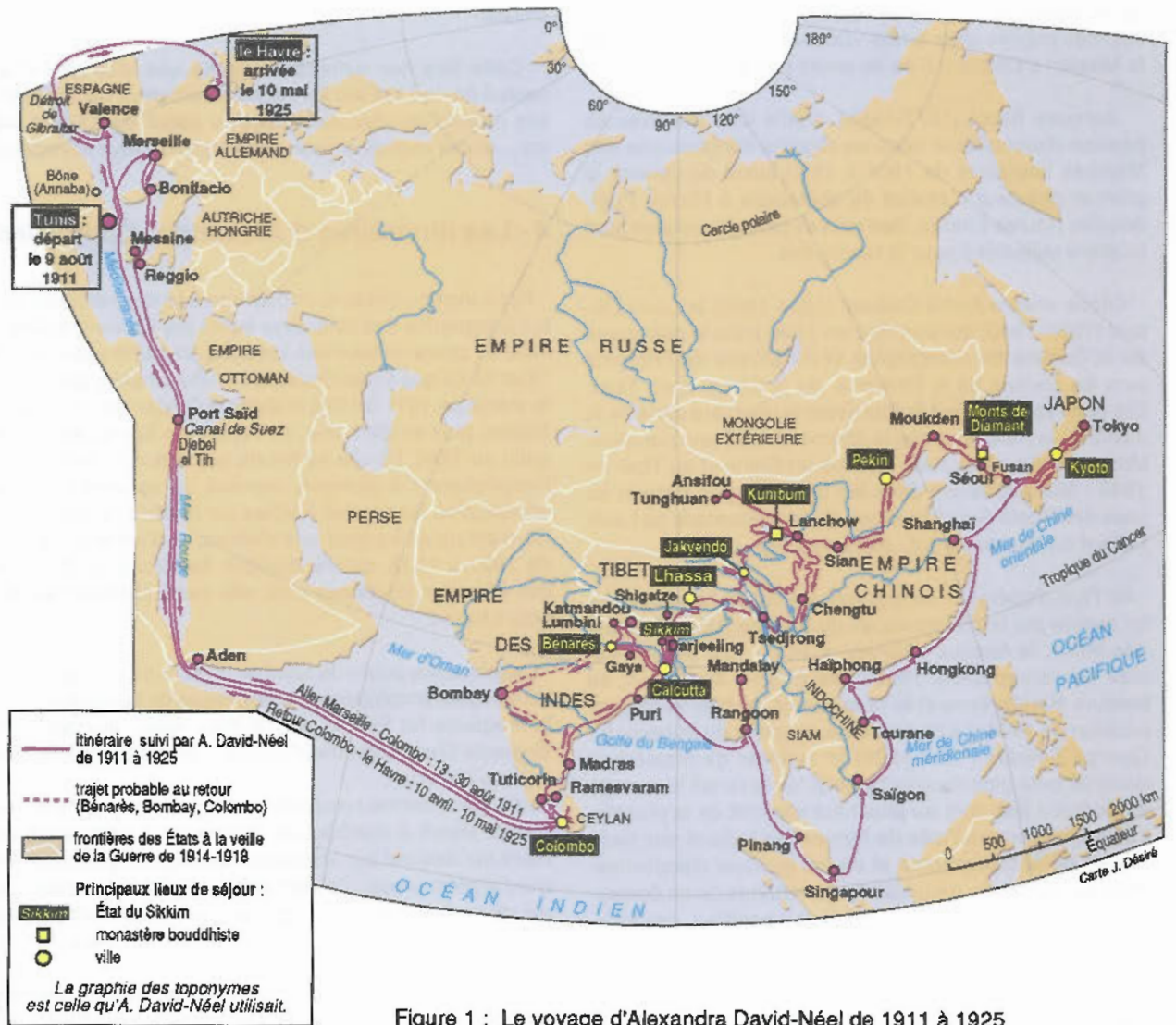


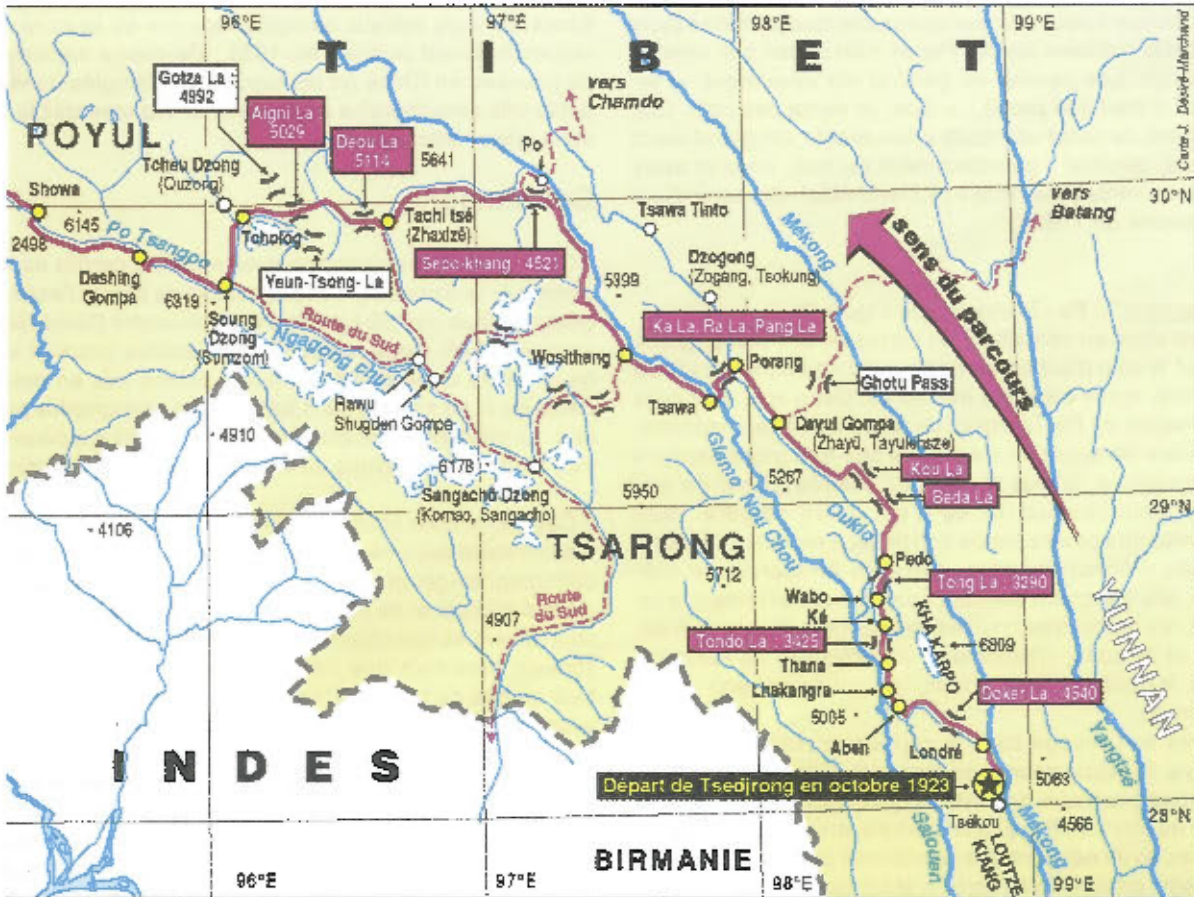
Figure 1 : Le voyage d'Alexandra David-Néel de 1911 à 1925



L'EXPLOIT D'ALEXANDRA DAVID-NÉEL : 2000 kilomètres à pied du Yunnan à Lhasa

Déguisée en mendiante tibétaine, accompagnée de son futur fils adoptif, Alexandra David-Néel part de Tsedjrong en octobre 1923. Après avoir marché pendant quatre mois vers le nord-ouest, elle atteint Lhasa, en février 1924.

Figure 2 : L'itinéraire d'Alexandra David-Néel de Tsedjrong à Lhasa



	itinéraire suivi par A. David-Néel		localité traversée		lac, réseau hydrographique		col traversé par A. David-Néel
	quelques autres pistes		autre localité		1 : sommets enneigés, 2 : glaciers		autre col cité par l'exploratrice
	frontière d'État	Dayul	nom cité par l'exploratrice		cote d'altitude (exprimée en m), d'après cartes US séries TPC-ONC et sources diverses		province tibétaine
	départ : Tsedjrong arrivée : Lhassa	(Zhayu)	nom actuel (en pinyin) ; l'équivalence n'est précisée que pour les toponymes les plus connus				province chinoise